



Title	18 世紀バルト海世界における大国ロシア像の不在 : スウェーデン出身者によるロシア滞在記に関する一考察
Author(s)	古谷, 大輔
Citation	IDUN -北欧研究-. 2009, 18, p. 205-218
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95563
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

18世紀バルト海世界における大国ロシア像の不在 — スウェーデン出身者によるロシア滞在記に関する一考察 —

古谷 大輔

1. はじめに

2009年は大北方戦争におけるポルタヴァ会戦から300周年にあたる。一般的に、ロシアがスウェーデンに対して軍事的勝利を収めたポルタヴァ会戦は、スウェーデンの衰退とロシアの勃興というバルト海世界における地域大国転換の転機になったと理解されている。ここで地域大国の基準を特定の地域世界における軍事的プレゼンスの優位として理解するならば、確かにポルタヴァ会戦はバルト海世界における軍事的覇権の移行の契機だったと言えよう。

しかしながら、こうした文脈で用いられる地域大国は軍事的プレゼンスの優位に限って議論されるべきものであろうか。従来の近世ロシア国制に関する研究史では、ロシアの軍事的覇権確立の根幹に近世スウェーデンで実現された軍隊経営や官僚制度など政治技法の摂取があったことが明らかにされている。¹もしここで地域大国の基準を、隣接諸国家に対するなにかの政治技法や文化規範を提供した国家とするならば、人的・物的資源は貧しくともスウェーデンが近世バルト海世界における大国であったとも解釈できよう。近世スウェーデンはロシアに限らず、プロイセンやデンマークなど隣接諸国家に集約的な国家経営の技法を提供した国家であったからである。そしてスウェーデンにとっては、ルター派信仰や新ストア主義など、近世以降の国家社会を支えた政治文化の規範は、むしろヨーロッパ大陸の西方ないしは南方よりもたらされたものであり、それゆえそうした政治文化の規範を共有しつつも自らに対立するカウンター・アイデンティティとしてはデンマークやドイツが想定されることが常であって、ロシアはスウェーデンにとって「カウンター」たる要素を持ち合わせていない。

ここで地域大国の何たるかを議論する際に、我々はその基準の設定方法に問題が隠蔽されていることに留意せねばならない。つまり我々は、当該時代の歴史の趨勢が明らかとなった後世の立場に立って、地域大国の基準を設定して特定の国家の歴史的位置を解釈しようとする傾向があるということである。軍事的プレゼンスの優位にしる、政治技法や文化規範の模範にしる、我々がロシアやスウェーデンを地域大国と見なす基準が歴史の実態をどれほど反映しているものかどうかという問題、換言するならば同時代のバルト海世界に生きた者にとってそれらの基準が共有されていたかどうかという問題については、今一度同時代に生きた者

の残した史料に沈潜し、その証言に耳を傾けるべきであろう。

本稿は以上のような問題関心に立ち、バルト海世界における軍事的覇権がロシアへ移行したとされている大北方戦争終結以降からナポレオン戦争期にかけての大ロシア像の実態を分析する前提として、同時代のロシアに滞在したスウェーデン出身者によるロシア体験の叙述の特徴を析出することを目的とするものである。

2. 大北方戦争以降のスウェーデン出身者による旅行記／滞在記

本稿がロシアへの旅行者の記録に着目してロシア・イメージの検討を進めようとする理由は、近年ヨーロッパの歴史学界において啓蒙期に公にされた旅行記録の再検討作業を通じて、同時代に現れた新たな世界観把握の方法を分析する研究が進められており、それらの研究の知見を近世スウェーデン史に適用するならば、啓蒙期以降の旅行記に表現された空間認識は、北の方位感覚に裏付けられたスウェーデンに独特な世界観構築の一つの方法と考えられるためでもある。²そこで、本稿の議論をより明確にするために、ここで18世紀から19世紀初頭における旅行記録について概観しておきたい。

18世紀は、大北方戦争の敗北によって軍事的覇権が失われたスウェーデンにおいて、バルト海帝国と通称される広域支配圏に代わる秩序の再編が求められた時代であった。政治的・経済的な再編は王国議会を中心とした国制再編や議会を中心とした重商主義政策の推進などに見られたが、同時にこの時期にはスウェーデンの秩序の理念的な再編も進んだ。それは、18世紀以前より形成されつつあった北という方位感覚で裏付けられた独特な世界観構築の継続であったとも言えよう。

近世スウェーデンに生きた知識人は、16世紀以降大陸ヨーロッパから伝わった人文主義的学知の技法に従って、一方では古代以来の歴史的系譜を歴史書で著しながら、他方ではスカンディナヴィアという自然環境の特殊性を地理書で著した。³リュードベック (Olof Rudbeck d.ä., 1630-1702) によって体系化されたゴート主義に見られるように、近世スウェーデンにおける世界把握の方法の特徴は、時間軸と空間軸によって設定された座標のうえで自らの歴史と地理の特殊性を位置づける点にあった。こうした世界観把握の方法は大北方戦争によって断絶したわけではない。例えば、ラップランドへの探検事業を通じてスカンディナヴィアにおける自然環境の独自性を明らかにしようとする態度は、リュードベックの息子 (Olof Rudbeck d.y., 1660-1740) を経て生物分類の祖として知られるリネー (Carl von Linné, 1707-78) へと引き継がれた。さらにアメリカから日本へと及ぶ世界に派遣されたリネーの弟子たちによる探検事業の事績は、スカンディナヴィアとは異なる世界の事例を集積することで、逆に北の世界の独自性をあぶり出す結果をもたらした。

このように本稿が対象とする大北方戦争以降の時代は、独特な空間把握に基づく新たな世界観の構築が図られた時代だったと言えるが、そうした世界観を普及するに活用された旅行記が執筆者の意図を完全に反映して世に普及したかどうかという点については、同時代の出版事情に関する観点から一定の留保が必要である。確かに、啓蒙期ヨーロッパにおいて旅行記は最も読まれた書籍ジャンルとして知られており、スカンディナヴィア出身者による旅行記も数多く刊行されるようになった。⁴ リネーによるラップランドやスコーネ、ダーラナの探検記をはじめ、彼の弟子にあたるカルム (Pehr Kalm, 1716-79) の北米探検記、チューンバリ (Carl Peter Thunberg, 1743-1828) による日本滞在記、イギリスの J. クックとともに南洋を航海したソランデル (Daniel Solander, 1733-82) による航海記など、博物学的関心に基づいて世界を探索した者による旅行記が数多く出版された。⁵ またその一方で、ホルベア (Ludvig Holberg, 1684-1754)、バゲスン (Jens Immanuel Baggesen, 1764-1826)、フランセーン (Frans Mikael Franzén, 1772-1847)、ウーレンスレーヤ (Adam Gottlob Oehlschläger, 1779-1850)、イエイエエル (Erik Gustaf Geijer, 1783-1847) といったスカンディナヴィア文学史に名を残す者たちが、スカンディナヴィアから大陸ヨーロッパへと旅をした際の印象を記録した旅行記も公刊された。アジア、アメリカなどへの探検事業や大陸ヨーロッパへのグランド・ツアーを踏まえた旅行記の存在は、読者が異文明に対する博物学的関心をもつにせよ、あるいは大陸のヨーロッパ文明に対する憧憬を抱くにせよ、異者との接触を通じた新たな自己認識の陶冶に重大な契機を与えたことは事実だろう。⁶

しかし、そうした啓蒙期における旅行記の隆盛は、18世紀半ば以降の出版市場の勃興を背景としていたことを忘れてはならない。スウェーデンでは1766年の出版自由法の制定の前後に書籍の印刷・販売を担う出版業者が登場し、国内に流通する書籍数は飛躍的に増加した。⁷ 例えばサルヴィウス (Lars Salvius, 1706-73) はこの時期のスウェーデンを代表する出版業者であったが、彼が経営した出版社はスウェーデン科学アカデミーの定期刊行物を発行するだけではなく、自ら交流をもったリネーや経済学者シュデーニウス (Anders Chydenius, 1729-1803) など、啓蒙期スウェーデンを代表する知識人に著書の執筆を依頼し、彼らの記述を編集して刊行した。⁸ すでに啓蒙期のスウェーデンにあつて、著名な知識人による業績は、書籍の編集・印刷・販売を一手に引き受ける出版業者の手を通じて、出版市場に商品価値を有する出版物として普及させられていたのである。

そうした知識人による旅行記は、読者が執筆者の記述を通じて異文化を追体験できるという点に商品価値が見出され、出版業者によって編集・販売された経緯をもつ以上、その内容が執筆者本人の意図をどれだけ反映していたものかについては、今後より慎重な検証作業が必要となろう。それに対して、本稿が史料とし

て扱う記述は、商品化を前提とせず18世紀から19世紀初頭にかけてロシアに渡航したスウェーデン出身者によって記録された滞在記である。⁹ 本稿がそれらを選択した理由は、スウェーデン出身者によるロシア・イメージは、商品としての価値を念頭に置いて出版業者の意図が介在させられた旅行記以上に、より直接的に記録されていると判断したためである。¹⁰

3. ロシア滞在の記録に見られる親近感の描出

本稿が、スウェーデン出身者によるロシア把握の実像に肉薄すべく検討の対象として選択したロシア滞在の記録は、おおよそ以下の二つに分類できる。一つは、平時にあつて外交業務や自らの事業を目的として自発的にロシアを訪問している人々による記録である。これら自発的ロシア滞在者の多くは、彼らの関心ある分野に関して情報を得る過程で彼らが体験した日常の記録を残している。これに対して、もう一つのロシア滞在記は、18世紀から19世紀初頭にかけてスウェーデンとロシアの間で勃発した戦争の結果、戦時捕虜などの形で強制的にロシアに滞在することを求められた人々によって残された記録である。戦時下にあつてこれらの人々から見ればロシア滞在の最終的地などは明らかにされないまま、彼らが投げ込まれた状況のなかでサンクト・ペテルスブルグやモスクワといった都市から遠く離れた地でロシアでの彼らの時間を過ごしている。

それでは、以下にそうしたロシア滞在記に見られるロシア叙述の特徴について、整理を進めたい。まず平時における自発的なロシア渡航者の一例として、スウェーデンの王国修史官を務めたブロックマン (Nils Reinhold Brockman, 1731-1770) の記録を紹介しよう。¹¹ 1754年7月にブロックマンはデンマーク出身の歴史家ランゲベク (Jacob Langebeck, 1710-75) と共にロシアにおける公文書管理の調査を目的としてサンクト・ペテルスブルグを訪れた。1754年7月29日の夕方彼らがロシアの首都に到着し、リガ屋 (Rigiska härbärget) と呼ばれる宿泊施設に滞在したときの経験を、ブロックマンは以下のように記録している。

我々は、宿の女将がデンマーク人だったことから、我々の状況は恵まれていると思った。我々には食事を共にする榮譽に浴したデンマーク使節モルツァン伯は、同じ通りに住んでいた。…我々はペテルスブルグに住んでいるマグヌセンという名前の商人に会った。彼は常に礼儀正しく、信頼できる男性であった。

(Brockman, *En resa genom östersjöprovinserna*, s. 93)

ブロックマンによるこの記述から、サンクト・ペテルスブルグが多国籍都市だったことがわかるが、それ以上にブロックマンらは、彼らの身近に親近感を覚える

者が存在したことにより、異国の地にあつて安心感を得ていたことを読みとれる。¹² サンクト・ペテルスブルグにもとより生活していた宿泊施設の女将、デンマーク使節、デンマーク人商人など、親近感を覚える者の存在は滞在経験が肯定的に記述する背景的要因を準備していると言えよう。ブロックマンは彼の記録のなかで再三再四そうした親近感を与える対象について触れている。例えば、次に紹介する引用は、サンクト・ペテルスブルグにおける同じスウェーデン出身者に関する記述である。

ペテルスブルグの通りは、至る所でストックホルムに広がる通りよりわずかに大きい。ミリオン街と冬宮の間にはピョートル1世の像が立つ大きな広場があり、その近くにスウェーデン使節ポッセ男爵が住んでいた。彼をはじめ法務秘書官ヤンケ、私設秘書官エークマンは私にたいそう親切にしてくれ、私は三、四回、彼ら使節団とともにその場所で食事をした。

(Brockman, *En resa genom östersjöprovinserna*, s. 94)

ブロックマンがこの引用で記録しているポッセ、ヤンケ、エークマンといった人物とどのようにして接触をととつたかについて記述はない。しかし、当時の旅行者の慣行に従うならば、旅行の準備段階でロシアにいる同郷の居住者をあらかじめ調査し、現地での滞在と調査を円滑に進めるべくとりわけ外交業務の従事者と接触していたということは想像に難くない。¹³ この場合、例えば、大使館と領事館などでの外交業務で際だった位置をもつ人物がロシアへの一時的な訪問者にとって窓口となり、彼らを通じて訪問先の都市社会に触れ、ロシアとそこに住む人々に関する役に立つ情報に接近することができたと理解できる。そして、こうした外交業務上の人物たちもまた、異国に赴いた一時的滞在者に親近感を与える機能を果たしていたと言えよう。ブロックマンの記録には、そうした親近感を与える機能を果たした同じスカンディナヴィア出身者との日常的な接触の記録が多く、ロシア滞在記とはいえ、彼が記録する対象はロシア人ではなく、彼がともに時間を過ごしたスウェーデン人とデンマーク人だったとも解釈できる程である。

次に、戦時下にありながらも外交業務を目的としてロシアに渡航したブランデル (Gustav Brandel, 生没年不明) の記録を紹介しよう。¹⁴ 彼はナポレオン戦争の時期にロシア皇帝アレクサンドル1世の下へ派遣されたスウェーデン使節ルーヴェンイエルク伯 (Carl Löwenhielm, 1772-1861) に秘書官として随行した人物である。ルーヴェンイエルク伯を代表とするスウェーデン使節団は、ロシア皇帝の親征に従って戦地となったロシア、ドイツ、フランスとロシア皇帝と行動を共にした。1802年-25年にかけて残されたブランデルの記録は、先に紹介したブロックマン

のように渡航の目的地が定まっていたわけではないが、ロシア皇帝とスウェーデン政府の外交窓口としての業務内容が定まっていた者によって記録されたものであり、いわば自発的渡航者の記録として分類しうるものであろう。彼の記録のなかでは、スウェーデン使節団がロシアをはじめとする異国の地でいかに生活し、現地にいかに溶け込んだかについて多々説明がなされている。

ロシア宰相主催の夕食会の日を除けば、この邸宅には毎朝ラセイ退役将軍も訪ねてきた。彼は80歳になろうかという人物で、ヴェリキルキの近所で隠遁生活を送っている。彼はイングランド生まれで、彼の母国語を聞くといつも喜んでいる。さらにはビリニユスからの亡命者であるセミストロフスキ伯爵や、太ったポーランド貴族、ロシア貴族たちも集まってきた。

(Brandel, *Dagbok 1802-1825*, s.1)

この引用では、出身地域ではなく、階級や位階といった社会関係に従って親近感を共有する集団が築かれていたことが示されている。彼の叙述からは、先に紹介したブロックマンの記録に記載されていた同郷者の存在のほかにも、自主的滞在者が渡航した先では、社会的・職業的的属性を同じくするという条件が滞在者に親近感を与える機能を果たしていたことが理解できる。¹⁵しかし、そうした環境下にあっても、ブランデルが親近感を得られない状況に直面していることを気づかされる記述も見受けられる。

午前中自宅に待機した後、私は午後2時にボルシュ伯爵夫人のもとに赴いた。夫人は私を夕食に招待した。…そこには、彼女の家族以外にもチェレパノフ連隊長、ヴィテフスクの副知事、2、3のロシアの紳士たちも招かれていた。…連隊長以外、残りの客はポーランド語とロシア語だけで話をしたので、夕食はあまり楽しくなかった。さらにそこでの会話は私が全く知らない個人と特定の事柄に集中していた。

(Brandel, *Dagbok 1802-1825*, Augusti 5, 1812)

この引用を直前に紹介した引用と比較するならば、この箇所では彼が理解できない言語の使用と彼が与り知らない会話の内容によって、社会的属性を共有する者の間でも親近感が喪失されている状況を理解できる。こうした親近感を感じさせる機能が失われた状況については、ブランデルのような自発的滞在者による記録以上に、戦時下にあつて強制的にロシアへの滞在を求められた者の記録のなかでより明らかとされている。そうした例として、次にハウスヴォルフ (Adelaide von

Hausswolff, 1789-1842) 女史によるロシア滞在記からの引用を紹介しよう。¹⁶ ナポレオン戦争時にヘルシングフォッシュ（現ヘルシンキ）に居住していた彼女と彼女の家族は、1809年ロシア海軍によるスヴェーアボリ（現スオメンリンナ）要塞攻略の後、捕虜となり、ヘルシングフォッシュからノヴゴロドへの移動を強制された。彼女の記録には、捕虜としてのロシア滞在時の経験が描かれている。

父は女中と召使いを呼びつけ…彼らが旅を共にして運命を共有する気があるか尋ねた。彼らは「はい。」と答えた。旅行を共にする一行のなかでイヤーネ夫人と私だけが女性であった。私たちにとっての喜びは、その集団のなかにいた多くの紳士たちが、しばしば私たちを励ましてくれたことだ。

(Hausswolff, *En svensk flickas dagbok*, s. 88)

この引用のなかで特徴的な点は、本来同性である女中たちの存在が、ハウスヴォルフたち滞在者の一群から消え失せてしまっていることである。この点について、近年、18世紀スウェーデンに來訪したイギリス人による滞在記の研究を進めたデイヴィス (Mark Davis) は、旅行者の一群における女中・執事と雇用者との間にある階層的排他性を議論しているが、彼の議論を参考にするならば、女中たちの存在の消失は、ハウスヴォルフ女史によって女中たちの社会的属性が共有されておらず、旅行者の集団から排除されているためだと解釈できる。¹⁷ またそうした記録からは、俘囚となって他の男性たちと共に強制的な移動に参加している「たった」2人の女性うちの1人として、集団内における彼女の唯一性を主張するための方法とも解釈できよう。もし社会的身分の相容れない下層の女性も同じ集団に含まれるならば、俘囚としての彼女の英雄的な唯一性は崩れてしまうからである。先に紹介したブロックマンやブランデルの記述では、旅行者の集団にも、その滞在先にも、親近感を得る機能をもった存在が確認できた点でハウスヴォルフのロシア経験とは異なる。強制的なロシア連行を経験したハウスヴォルフの記述では、自身の唯一性とロシア滞在の冒険的側面を強調するために、親近感を与える存在は同じ社会的属性を共有する異性にのみ求められ、同性であってもそれを共にしない者は排除されていた。

4. 親近感の有無によるロシア体験の記述の相違

これまでのところで、本稿は自発的・強制的の双方におけるロシア滞在者の記録に見られる記述の一端から、そこに同郷の者、社会的属性を共有する者など、異国の地にあつて親近感を感じさせる存在の有無が描写されている点を確認した。それでは、そうした親近感を感じさせる者の存在によって彼らのロシア体験の

記述はどのように影響されたのだろうか。

次に紹介する従軍牧師ヴィーンバリ (Anders Winberg, 1753-1831) は、スウェーデン王グスタフ3世が開始した対ロシア戦争中の1790年にロシア軍の捕虜となった人物である。彼は1790年7月3日にヴィーボリ (現ヴィーボルク) から出帆したガレー船に乗船していたが、その船は座礁し船員ともどもロシア軍によって捕縛された。2ヶ月間の監禁の後、ヴィーンバリとガレー船の船員たちは、レヴァル (現タリン) からノヴゴロド、さらにはヤーロスラフまで移動することを強制された。ヴィーンバリは多くの同胞とともにあったが監視は特に厳しくなく、彼らは訪問した先々の町で自由に動き回ることができた。牧師であったヴィーンバリはそこでロシア正教会の礼拝にも出席し、ロシア人の宗教儀式と信仰形態の印象を記述しているが、彼の記述からはスウェーデン人から見たロシアの宗教事情に対する違和感を確認できる。¹⁸

ロシア人は水の中に入って洗礼を施す。この方法によって洗礼を施されない人々はキリスト教徒ではないとロシアでは主張されている。彼らは、他人の使った、洗われていない器やスプーンで飲んだり、食べたりしようとはしなかった。彼らのなかには (注…彼らの言う洗礼を受けていない) スウェーデン人が使ったスプーンを火の中に放り込むものもいた。

(Winberg, *Dag-bok*, s. 86-87)

ヴィーンバリがここで記録している対象は、キリスト教信仰の唯一真正な形態と主張するロシア正教会の姿である。彼によって記録されたロシア正教会の独善的なイメージはそれ以前のスウェーデン出身の滞在者によって記録されたイメージと類似している点で、こうした滞在記もまたそれ以前に書かれたロシア文化の違和感を記述した他の滞在記を引き継いでいる。¹⁹ ここでヴィーンバリの記録が戦時における強制的なロシア移送という環境において残されたものであったことを考慮に入れるならば、ロシア人とスウェーデン人の不一致を記述した背景には、旅行者が滞在した環境において親近感を覚える者を失われていたことが一つの要因として考慮に入れねばなるまい。ヴィーンバリの場合には、先に紹介したブロックマンやブランデルのように移動した先々の町や村で、同郷人や社会的属性を共にした者を媒介とした現地体験をしていない。従って、このような親近感を得る機能が失われた先でのロシア体験に遭遇した際には、スウェーデンとロシアとの文化的対立がより明瞭に記述されていると解釈できよう。

ロシアの聖職者の一人が、8月26日に私を訪ねてきた。朝であったが、彼は

すでに酔っぱらっていた。まるでロシアの聖職者は飲酒を神に宣誓した人物のように私には見えた。聖職者はラテン語を話した。奇妙で滑稽だった。私は、数日後に再び彼を訪ねた…。その聖職者の妻と一緒に場で、コメディが起きた。彼女は、私が聖母マリアと十字架の前で十字を切ってお辞儀をすることを望んだ。彼女は私の指を保つ方法を私に教えて、十字を作ってお辞儀をし、私に同じようにするよう頼んだ。私は聖職者に「これはスウェーデンでの習慣ではない。」と囁く一方、彼女の話してくれたこと、してくれたことには気がつかないふりをした。その聖職者は私に何かを見せてくれようと私の手をとった。それでも彼の妻はあとに続いて私の腕をつかんで十字を切らせようとした。彼は数回彼女を部屋の隅へと連れていったが、その度ごとに彼女は戻ってきた。

(Winberg, *Dag-bok*, s. 87)

この引用にあるロシアの聖職者の描写でも、酒に対する聖職者の意思の弱さなど、ロシアの聖職者に対するステレオタイプ化されたイメージの援用が認められる。²⁰ ヴィーンバリが記録したこの時の経験を「コメディ」と表現するとき、彼も人口に膾炙していたロシア聖職者に対する滑稽なイメージを無意識のうちに参照していたと言えるだろう。しかし、ここで記述の対象となった出来事が起きた状況は、いささか特殊でもある。ここでは旅行記の記述者であるヴィーンバリは主体的にこの状況に関わっているのではなく、この情景の主体はむしろロシア正教の宗教的実践を求めた聖職者の妻であった。つまり他者の側がヴィーンバリに対して関心をもったことにより、滞在記の筆者が他者による関心の対象に位置する主客逆転の現象が起きているのである。

こうした主客の逆転は、非自発的にロシアへの移動を強制され、他者の好奇の目に晒された者による滞在記のなかでしばしば見受けられる特徴である。最後に紹介するエーシュトルム (Eric Gustaf Ehrström, 1791-1835) の滞在記もそうした事例の一つと言える。²¹ しかしエーシュトルムの場合には、他者の関心の対象に一時的滞在者が転じたことによって、同郷者でもなく、社会的属性の共有者でもない者との親近感が生まれたことが確認できる点で、先のヴィーンバリの事例とは異なる記述である。

エーシュトルムは、ナポレオン戦争期にトゥルク・アカデミーからロシア語を学ぶためにモスクワへ留学していた人物である。しかし1812年のナポレオン率いるフランス軍によるロシア侵攻を受けて、彼の計画は変更を余儀なくされ、彼は他の留学生とともにニジニ・ノヴゴロドへ向かう避難民となった。エーシュトルムの周囲にはトゥルク (現オーボ) 以来の知人たちがいたことは事実であるが、彼の逃避行の記録からは、一時的滞在者が他者の関心の対象となることで、異国

の者に対しても親近感を獲得するという一面を確認できる。ここでそうした事例として、エーシュトルムがニジニ・ノヴゴロドに滞在したとき、彼がヤゴジンスキー (Andrej Ivanovitj Jagodinskij, 生没年不明) という市民と知り合いになった際の記述を紹介しよう。

私は、最上の礼節をもってもてなされた。私は夕方8時まで彼の家滞りしたが、それは私にとって大きな試験のような経験だった。彼らは私の服について尋ね、私がトゥルクで作られたものだと言ったと彼らに話すと、彼らはまじまじと私の服を観察し、同じような服がスウェーデンとフィンランドだけでなく、ロシアでも作られていたという事実を驚いていた。私が帰ろうとすると、彼らは私に翌日の晩に再び訪問するよう尋ねてきたので、私は翌日も彼の家を訪ねた。親愛なる友よ、あなたなら理解できよう、彼こそが私にとって、本当の意味でのロシアにおける最初の知人となったことを！（注…同じくトゥルク・アカデミーから留学していた）オッテリンはどうだったか？とあなたは尋ねるだろう。オッテリンは残念ながら訪問できなかった。彼は悪寒に苛まれていたからである。

(Ehrström, *Moskva brimer*; s. 129-130)

この引用は、エーシュトルムがヤゴジンスキーと知り合ったその日の夕方にヤゴジンスキーの家に招かれた際の記述である。この記述のなかで、エーシュトルムがヤゴジンスキーから本来親近感を得ることのない者たちの関心の対象に自らがいることに意識したことが描かれている。その場にはトゥルク以来の彼の親しい友人がいなかったことも明らかにされ、エーシュトルムが同郷人の存在しない状況にあつて、いかにして新しくロシアの知人を作ったかについて言及されている。同郷の者も、社会的属性を共有する者も存在していなかったという事実にもかかわらず、この場合にはロシア人との対立ではなく、エーシュトルム自身がロシアの家族の好奇心の対象となり、エーシュトルム自身が他者による話題の中心にいることを自覚することで友好的接触が果たされた一事例と言えよう。

5. おわりに

本稿は、出版市場の商業ベースに乗ることがなかったスウェーデン出身者によるロシア滞在記録を史料として用いて、今日の我々がバルト海世界における地域大国として当然視している大北方戦争後のロシアを、スウェーデン出身者がどのような眼差しでもって把握しようとしていたかを検討した。その際、ロシアでの滞在記録のなかには、スウェーデン出身者にとって親近感を与える機能を有する存在が記録されている特徴を見いだし、それら親近感の有無がスウェーデン出身

者によるロシア体験に与えた影響の一端を垣間見た。

我々が異国の地を旅するとき、見知らぬ環境のなかで自らが親近感を覚える存在から遠く離れ、自らとは異なるものと対峙し、そこに他者の存在を自覚する過程があるように見える。しかし実際には、異国の地にあっても親近感を得る方法は意識的・無意識的を問わず様々に存在している。本稿が検証したように、スウェーデン出身者のロシア滞在記において頻繁に記述されている同郷の者や社会的属性を共有する者の存在は、見知らぬ土地に滞在する者の経験に保証を与え、滞在記のなかにおけるロシア叙述に肯定的性格を付与する鍵となっていると言えよう。そうした親近感を得る存在の有無は、彼らのロシア体験にも影響を与えていた。戦時においてロシアへの強制的滞在を強いられ親近感を得る手段が見つからず、ロシアへの接触方法を欠いた場合には、ロシアは完全なる他者として認識される可能性が高い。そのように考えるならば、我々がこうした滞在記録を史料として用いながらロシア像の再検討を行う場合には、一時的滞在者を取り巻く親近感の対象が取り除かれた場合にのみ、はじめてロシアの姿を明らかにすることができると言えよう。しかしそのような場合でも、親近感を得る存在のない環境に滞在者が置かれながらも、スウェーデン出身者が他者の関心の対象に転じたとき、他者は他者でなくなり、むしろ親近感を付与する者へ変貌する可能性もあることに我々は注意を払わねばならない。

18世紀から19世紀初頭の時期に記録されたロシア滞在記録には、以上に整理したような親近感の対象が記述される特性が見受けられる。それゆえ、それら親近感に触れたスウェーデン出身者のロシア体験からは、今日の我々が当然視するような大国ロシア像は浮かび上がってこない。本稿の論題を「大国ロシア像の不在」とした理由はそこにある。本稿が検討の対象として扱った滞在記録はいまだ少数に限られているが、今後より多くの史料分析が進められることで大北方戦争以降のバルト海世界に生きた人々の意識のなかに大国ロシア像が不在であることが明らかにされたとするならば、我々には再検討を要するより大きな歴史的問題が突きつけられたことになる。すなわち、第一にバルト海世界の主権国家体制のなかにおいて我々が意識するような大国ロシア像はいつから構築されるようになったのかという問題、第二にバルト海世界の近世的文脈において大国とされる基準はどこに見いだせるのかという問題である。それら将来的に検討されるべき課題を発見したことを成果として、本稿の筆を置くこととする。

(本稿は、平成20年度科学研究費補助金基盤研究(C)「近世ヨーロッパ周縁世界における戦争と「帝国」再編」ならびに同新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の助成を受けて進められた研究成果である。)

注

1. 土肥恒之, 「ピョートル改革とロシア帝国の成立」, 田中陽児他編, 『世界歴史大系ロシア史2』, 山川出版社 1994年, 34-35頁. ピョートル1世治期ロシアへのスウェーデンの政治技法の伝播については, C. Peterson, *Peter the Great's Administrative and Judicial Reforms: Swedish Antecedents and the Process of Reception*, Stockholm 1979が詳しい.
2. 本稿の分析視角は, とりわけ H. Schulz-Forberg, ed., *Unravelling Civilisation: European Travel and Travel Writing*, Brussels 2005 に所収された以下の論考の議論を参考にしている. Cf. J. M. Buzard, James M., “What Isn't Travel?”, *op. cit.*, pp. 43-62; L. Mondana, “Seeing as Condition of Saying: On the Discursive Construction of Knowledge in Travel Accounts”, *op. cit.*, pp. 63-88; L. Wolff, “British Travellers and Russian Orthodoxy in the Age of Enlightenment: The Religious Features of Philosophic Geography”, *op. cit.*, pp. 129-142.
3. 北という方位感覚に裏付けられたスウェーデン独自の世界観構築に関しては, 例えば, B. Hennigsen, “The Swedish Construction of Norden”, Ø. Sørensen and B. Stråth, eds., *The Cultural Construction of Norden*, Oslo 1997, pp. 91-120 を参照せよ.
4. H. A. Barton, “Iter Scandinavicum: Foreign Travelers' Views of the Late Eighteenth-Century North”, *Scandinavian Studies*, 1996, pp. 1-18.
5. ウップサーラ大学でリネーの薫陶を受けた者のうち, ロシア帝国で探検事業を行った者としては, ファルク (Johan Peter Falck, 1732-74) が知られている. 彼は, 1768年から 1774年にかけてドイツ出身の生物学者パラス (Peter Simon Pallas, 1741-1811) とともにロシア, 中央アジアを経て清との国境線まで探検し, ヴォルガ川に臨むカザンにて没した. 彼の旅行記は, 彼の死後にドイツにて編集され, J. P. Falck, *Beyträge zur Topographischen Kenntniss des Russischen Reichs*, s.n., 1786として公刊された. なお, リネーの弟子たちによる世界各所への探検事業については, 例えば, S. Sörlin, “Globalizing Linnaeus: Economic Botany and Travelling Disciples”, *Tijdschrift voor Skandinavistiek*, vol. 29 nos.1 &2, 2008, pp. 117-143 を参照せよ.
6. 異者接触の契機としての旅行の対象は, 非ヨーロッパ世界や地中海世界に限られず, 同時代のヨーロッパ人にとってはスカンディナヴィアもまた対象の一つとなっていた. 18世紀後半から19世紀初頭にかけて数多くのスカンディナヴィア出身者が古典文明の縁を求めて地中海世界を目指した一方, イギリス, フランス, イタリア, ドイツ出身の知識人がスカンディナヴィアを訪れた. 例えば, イタリア出身の探検家アチェルビ (Giuseppe Acerbi, 1773-1846) がスカンディナヴィアを「北のアルカディア」と紹介したように, 大陸ヨーロッパからの旅行者は, スカンディナヴィアの未開の風土のなかに大陸ヨーロッパで失われたヨーロッパ文明の牧歌的原風景を模索しようとしていた. Cf. H. Sandblad, “Edward D. Clarke och Giuseppe Acerbi, upptäcktsresande i Norden 1798-1800”, *Lychmos*, 1979-80, ss.155-205.

7. 18世紀以前のスウェーデンでは、国内の印刷市場は印刷ギルドにより独占される一方、一部の読書人が求める文献は主にドイツで印刷され、それが輸入販売されていた。高額な輸入文献は一部の富裕層が邸宅に設けた読書室を除けば広く社会には普及せず、一般住民は貸本業者が地方社会を巡回した際に接する機会が提供されたに過ぎなかった。18世紀スウェーデンにおける出版市場については、H. Järv, utg., *Den svenska boken 500 år*, Stockholm 1983, ss.130-135 を参照せよ。
8. サルヴィウスが単なる出版業者ではなく、印刷メディアを通じて当時の政治経済学などの学問分野に影響を与えていたことは、L. Magnusson, “Economic thought and group interests : Adam Smith, Christopher Polhem, Lars Salvius and classical political economy”, *Scandinavian Journal of History*, vol.2, 1977, pp.243-264 に詳しい。
9. 本稿が検討の対象とした滞在記録は、18世紀から19世紀初頭に成立したものである。伝統的なスウェーデン史の時代区分に従えば、この時期は自由の時代、グスタヴ啓蒙専制期、1809年憲法成立から1865年の身分制議会廃止に至る近代立憲体制の前期にあたる。またロシア史の時代区分に従えば、ロマノフ朝帝政におけるピョートル1世からアレクサンドル1世の治世期にあたる。ここでスウェーデン、ロシア双方が含まれるバルト海世界の展開を追うならば、18世紀前半の大北方戦争で確定された国際秩序はナポレオン戦争期まで維持され、ナポレオン戦争の終結によって近代以降の秩序へ変更されたことに鑑み、大北方戦争以降のバルト海世界における大国ロシア像を検討する本稿では、ナポレオン戦争期に成立したロシア滞在記も史料として活用した。
10. 本稿では、出版市場での商品化を念頭に編集された渡航記録を「旅行記」と表現し、他方、商品化を念頭に置かず渡航先の日常経験を綴った記録を「滞在記」と表現している。
11. N. R. Brockman, “En resa genom östersjöprovinserna år 1754: Magister N. R. Brockmans reseanteckningar”, A. Loit, utg., *Svio-Estonica Studier*, vol. 12, 1954, ss. 82-138.
12. B. Jangefeldt, *Svenska vägar till S:t Petersburg: Kapitel ur historien om svenskarna vid Nevans stränder*, Trelleborg 1998, ss.9-10. ヤングフェルトによる研究のなかでも、18世紀サンクト・ペテルスブルグの住民が多国籍であったことが指摘されている。
13. ここで本稿が参照している議論は、イギリス出身者のスウェーデン滞在者の記録を扱ったデイヴィスの研究である。デイヴィスによれば、何らかの業務を抱えてスウェーデンに渡航するイングランド出身者は事前にスウェーデンにおける外交業務の従事者と接触を図っていたという。Cf. M. Davis, *A Perambulating Paradox: British Travel Literature and the Image of Sweden c. 1770-1865*, Lund 2000.
14. G. Brandel, *Dagbok 1802-1825*, M227, Kungliga Biblioteket, Handskriftsavdelningen.
15. Davis, *op. cit.*, p. 63.
16. A. von Hausswolff, *En svensk flickas dagbok under krigsfångenskap i Ryssland 1808-1809*, Göteborg 1912.
17. Davis, *op. cit.*, p. 77.

18. A. Winberg, *Dag-bok hållen på kongl. galär flottan åren 1789 och 1790 samt fångenskapen i Ryssland*, Stockholm 1967.
19. ヨーロッパからのロシア渡航者によって形成されたロシア正教会のイメージについては, L. Wolff, *The Enlightenment and the Orthodox World: Western Perspectives on the Orthodox Church in Eastern Europe*, Athens 2001 に詳しい.
20. *Ibid.*, pp.167-182. ヴォルフの議論によれば, ヨーロッパから渡来したロシア滞在者によってステレオタイプ化されたロシア正教の聖職者のイメージは, ほかにも「無知」, 「未開の下層民に対する啓蒙の責任の回避」などがあると言う.
21. E. G. Ehrström, *Moskva brinner: En nyupptäckt svensk dagbok från 1812*, Stockholm 1984.

Om frånvaron av en ryska bild av stormakten i Östersjöområdet på 1700-talet

— En forskning om reseanteckningar om Ryssland skrivna av svenskar —

Daisuke Furuya

Sammanfattning

Idag vet vi att Sverige förlorade ställningen som "stormakt" i Östersjöområdet och att Ryssland blev "stormakt" efter det stora nordiska kriget. Betydelsen av "stormakt" som vi använder idag kanske grundar sig på den militära övermakten. Men vad betydde "stormakt" för svenskar på 1700-talet? Hade svenskarna efter det stora nordiska kriget samma bild av Ryssland som vi har idag? Målet för uppsatsen är att undersöka reseanteckningar om Ryssland skrivna av svenskar från 1700-talet till början av 1800-talet och att förklara den verkliga bilden av Ryssland som svenskarna hade under 1700-talet.

När vi reser, lämnar vi ofta det bekanta och möter det annorlunda eller främmande i den nya miljön. Men när vi läser de anteckningar som de svenska resenärerna gjorde i Ryssland på olika sätt, hittar vi många uppgifter som är välbekanta för dagens svenskar. T ex erfarenheten för dem att träffa landsmän eller människor som delar deras uppfattning och de sociala klasserna tycks ha påverkat anteckningarna om Ryssland. När vi hittar anteckningar som de svenska resenärerna ansett trovärdiga i Ryssland, är det svårt för oss idag att förstå deras inställning till Ryssland som "stormakt" Om vi inte kan bekräfta en sådan inställning inom de historiska anteckningarna, måste vi tänka om när svenskarna började erkänna Ryssland som "stormakt" och vad förklaringen av "stormakt" rimmar med de historiska realiteterna i Östersjöområdet på 1700-talet.